



尾崎放哉選句集より

大正一三（一九三八）年、放哉は一燈園の先輩の世話を受けて、兵庫県西須磨の須磨寺大師堂の堂守となる。『層雲』に投稿を始めた頃からの自由律俳句に磨きがかかるのは、この時代である。

- 1 あすは雨らしい青葉の中の堂を閉める
- 2 一日物云はず蝶の影さす
- 3 友を送りて雨風に追はれてもどる
- 4 雨の日は御灯ともし一人居る
- 5 なぎさふりかへる我が足跡も無く
- 6 軽いたもとが嬉しい池のさざなみ
- 7 静もれる森の中をののける此の一葉
- 8 井戸の暗さにわが顔を見出す
- 9 沈黙の池に亀一つ浮き上る
- 10 鐘ついて去る鐘の余韻の中
- 11 炎天の底の蟻等ばかりの世となり
- 12 山の夕陽の墓地の空海へかたぶく
- 13 柘榴が口あけたたはけた恋だ
- 14 たつた一人になりきつて夕空
- 15 墓原路とともなく夕の漁村に下りる
- 16 高浪打ちかへす砂浜に一人を投げ出す
- 17 雨に降りつめられて暮るる外なし御堂
- 18 昼寝起きればつかれた物のかげばかり

- 19 何も忘れた気で夏帽をかぶつて
20 ねむの花の昼すぎの釣鐘重たし
21 氷店がひよいと出来て白波
22 父子で住んで言葉少なく朝顔が咲いて
23 砂山赤い旗たてて海へ見せる
24 声かけて行く人に迎火の顔をあげる
25 蛇が殺されて居る炎天をまたいで通る
26 ほのかなる草花の香ひを嗅ぎ出さうとする
27 潮満ち切つてなくはひぐらし
28 空に白い陽を置き火葬場の太い煙突
29 むつつり木槿が咲く夕べ他人の家にもどる
30 いつ迄も忘れられた儘で黒い蝙蝠傘
31 蛙の子がふえたこと地べたのぬくとさ
32 何かしら児等は山から木の実見つけてくる
33 船乗りと山の温泉に来て雨をきいてる
34 あらしの闇を見つめるわが眼が灯もる
35 海のあけくれのなんにもない部屋
36 銅銭ばかりかぞへて夕べ事足りて居る
37 タベひよいと出た一本足の雀よ
38 たばこが消えて居る淋しさをなげすてる
39 おだやかに流るる水の橋長々と渡る

- 40 空暗く垂れ大きな蟻が畳をはつてる
41 蟻を殺す殺すつぎから出てくる
42 雨の幾日かつづき雀と見てゐる
43 雑巾しぼるペンだこが白たたけた手だ
44 友の夏帽が新らしい海に行かうか
45 写真うつしたきりで夕風にわかれてしまつた
46 血がにじむ手で泳ぎ出た草原
47 昼の蚊たたいて古新聞よんで
48 人をそしる心をすて豆の皮むく
49 はかなさは燈明の油が煮える
50 刈田で鳥の顔をまぢかに見た
51 落葉木をふりおとして青空をはく
52 からかさ干して落葉ふらして居る
53 傘さしかけて心寄り添へる
54 赤とんぼ夥しさの首塚ありけり
55 障子しめきつて淋しさをみたす
56 庭石一つすゑられて夕暮が来る
57 木槿が咲いて小学を読む自分であつた
58 藁屋根草はえれば花さく
59 今朝の夢を忘れて草むしりをして居た
60 鳩がなくま昼の屋根が重たい

- 61 マツチの棒で耳かいて暮れてる
62 栗が落ちる音を見と聞いて居る夜
63 夕べ落葉たいて居る赤い舌出す
64 自らをののしり尽きずあふむけに寝る
65 何か求むる心海へ放つ
66 大空のました帽子かぶらず
67 仏体にほられて石ありけり
68 足音一つ来る小供の足音
69 何かつかまへた顔で見が藪から出て来た
70 昼だけある茶屋で客がうたつてる
71 打ちそこねた釘が首を曲げた
72 鳥がだまつてとんで行つた
73 昼ふかぶか木魚ふいてやるはげてゐる
74 妹と夫婦めく秋草
75 小さい火鉢でこの冬を越さうとする
76 心をまとめる鉛筆とがらす
77 仏にひまをもらつて洗濯してゐる
78 ただ風ばかり吹く日の雑念
79 二人よつて狐がばかす話をしてる
80 うそをついたやうな昼の月がある
81 酔のさめかけの星が出てゐる

- 82 考へ事して橋渡りきる
- 83 おほらかに鶏なきて海空から晴れる
- 84 山に家をくつつけて菊咲かせてる
- 85 しも肥わが肩の骨にかつぐ
- 86 板じきに夕餉の両ひざをそろへる
- 87 わがからだ焚火にうらおもてあぶる
- 88 傘干して傘のかげある一日
- 89 こんなよい月を一人で見て寝る
- 90 便所の落書が秋となり居る
- 91 竹の葉さやさや人恋しくて居る
- 92 めしたべにおりるわが足音
- 93 淋しいぞ一人五本のゆびを開いて見る
- 94 火ばしがそろはぬ儘の一冬なりけり
- 95 朝の白波高し漁師家に居る
- 96 草履が片つ方つくられたばこにする
- 97 島の女のはだしにはだしでよりそふ
- 98 今日も生きて虫なきしみる倉の白壁
- 99 黒眼鏡かけた女が石に休んで居るばかり
- 100 釘に濡手拭かけて凍てる日である
- 101 つめたい風の耳二つかたかくついでる
- 102 お堂しめて居る雀がたんともどつてくる

- 103 降る雨庭に流をつくり侘び居る
104 のら犬の背の毛の秋風に立つさへ
105 人殺しありし夜の水の流るるさま
106 水たまりが光るひよろりと夕風
107 片目の人に見つめられて居た
108 紅葉あかるく手紙よむによし
109 公園冬の小径いづこへともなくある
110 大地の苔の人間が帽子をかぶる
111 お盆にのせて椎の実出されふるさと
112 姉妹椎の実たべて東京の雑誌よんでる
113 かへす傘又かりてかへる夕べの同じ道である
114 赤ン坊のなきごゑがする小さい庭を掃いてる
115 雀のあたたかさを握るはなしてやる
116 酒もうる煙草もうる店となじみになつた
117 灰の中から針一つ拾ひ出し話す人もなく
118 曇り日の落葉掃ききれぬ一人である
119 門をしめる大きな音さしてお寺が寝る
120 うで玉子くるとむいて兎に持たせる
121 かまきりばかりと落ちて斧を忘れず
122 黒い帯しつかりしめて寒い夜居る
123 師走の夜の釣鐘ならす身となりて

- 124 師走の夜のつめたい寝床が一つあるきり
125 雪を漕いで来た姿で朝の町に入る
126 女と淋しい顔して温泉の村のお正月
127 破れた靴がぱくぱく口あけて今日も晴れる
128 寒鮎をこごえた手で数へてくれた
129 落葉掃けばころころ木の実
130 犬をかかへたわが肌には毛が無い
131 かたい梨子をかちつて議論してゐる
132 漬物桶に塩ふれと母は産んだか
133 溪深く入り来てあかるし
134 池を干す水たまりとなれる寒月
135 蜜柑を焼いて喰ふ小供と二人で居る
136 片つ方の耳にないしよ話しに来る
137 両手をいれものにして木の実をもらふ
138 女に捨てられたうす雪の夜の街燈
139 濠端犬つれて行く雪空となる
140 落葉拾うて棄てて別れたきり
141 こんな大きな石塔の下で死んでゐる
142 紺の香きつく着て冬空の下働く
143 あけた事がない扉の前で冬陽にあたつてゐる
144 きたない下駄ぬいで法話の灯に遠く坐る

- 145 冬川にごみを流してもどる
146 白ひく女が自分にうたをきかせて居る
147 堅い大地となり這ふ虫もなし
148 ゆるい鼻緒の下駄で雪道あるきつづける
149 ふところの焼芋のあたたかさである
150 ひげがのびた顔を火鉢の上につける
151 にくい顔思ひ出し石ころをける
152 底がぬけた柄杓で水を吞まうとした
153 雪空にじむ火事の火の遠く恋しく
154 雀がさわぐお堂で朝の粥腹をへらして居る
155 犬よちぎれるほど尾をふつてくれる
156 節分の豆をだまつてたべて居る
157 刈田のなかで仲がよい二人の顔
158 花が咲いた顔のお湯からあがつてくる
159 歯をむきだした鯛を威張つて売る
160 人を待つ小さな座敷で海が見える
161 夕の鐘つき切つたぞみの虫
162 夕飯たべてなほ陽をめぐまれてゐる

「小浜時代」

過酷な労働とは縁のない須磨寺での生活は放哉の気質によく合ったが、寺院内の紛争のためにおよそ一〇か月しか続かなかった。須磨寺を出た放哉は、大正一四（一九二五）年、福井県小浜町の常高寺に落ち着く。

- 163 あたまをそつて帰る青梅たくさん落ちてる
164 剃つたあたまが夜更けた枕で覚めて居る
165 一人分の米白々と洗ひあげたる
166 時計が動いて居る寺の荒れてゐる
167 乞食に話しかける我となつて草もゆ
168 考へ事をしてゐるたにしが歩いて居る
169 雪の戸をあけてしめた女の顔
170 留守番をして地震にゆられて居る
171 臍に湯をかけて一人夜中の温泉である
172 かぎりなく蟻が出てくる穴の音なく
173 かたい机でうたた寝して居つた
174 蜘蛛がすうと下りて来た朝を眼の前にす
175 雨のあくる日の柔らかな草をひいて居る
176 とかげの美しい色がある廃庭
177 土塀に突かひ棒をしてオルガンひいてゐる学校
178 うつろの心に眼が二つあいてゐる
179 母の無い児の父であつたよ

- 180 淋しいからだから爪がのび出す
181 ころりと横になる今日が終つて居る
182 一本のからかさを買してしまつた
183 朝早い道のいぬころ

貧乏寺だった常高寺での生活はまたたく間に終わり、放哉は荻原井泉水を頼つて京都へ。大正一四（一九二五）年の七月から八月、関東大震災後に母と妻を失い京都で独居生活を送る井泉水のもとに身を寄せることになる。

- 184 山寺灯されて見て通る
185 昼寝の足のうらが見えてゐる訪ふ
186 宵のくちなしの花を嗅いで君に見せる
187 蜘蛛がとんぼをとつた軒の下で住んでる
188 蓬ひに来たその顔が風呂を焚いてゐた
189 旧曆の節句の鯉がをどつて居る

「小豆島時代」

大正一四（一九二五）年八月、放哉は井泉水の紹介を得て、小豆島に渡る。西光寺の奥の院南郷庵の庵主となつた放哉は、酒と作句に明け暮れる。そして翌大正一五（一九二六）年四月七日、病没。享年は四一。

- 190 眼の前魚がとんで見せる島の夕陽に来て居る
191 いつしかついて来た犬と浜辺に居る

- 192 さはにある髪をすき居る月夜
193 漬物石になりすまし墓のかけである
194 すばらしい乳房だ蚊が居る
195 あらしの中のばんめしにする母と子
196 あらしのあとの馬鹿がさかなうりにくる
197 足のうら洗へば白くなる
198 海が少し見える小さい窓一つもつ
199 わが顔があつた小さい鏡買うてもどる
200 ここから浪音きこえぬほどの海の青さの
201 すさまじく蚊がなく夜の瘦せたからだが一つ
202 とんぼが淋しい机にとまりに来てくれた
203 なん本もマッチの棒を消し海風に話す
204 山に登れば淋しい村がみんな見える
205 雨の椿に下駄こらしてたづねて来た
206 叱ればすぐ泣く児だと云つて泣かせて居る
207 花がいろいろ咲いてみんな売られる
208 秋風の石が子を産む話
209 投げ出されたやうな西瓜が太つて行く
210 壁の新聞の女はいつも泣いて居る
211 鼠にジャガ芋をたべられて寝て居た
212 盆燈籠の下ひと夜を過ごし古郷立つ

- 213 少し病む児に金魚買うてやる
214 風吹く家のまはり花無し
215 山は海の夕陽をうけてかくすところ無し
216 水を呑んでは小便しに出る雑草
217 花火があがる空の方が町だよ
218 一疋の蚤をさがして居る夜中
219 あげがたとろりとした時の夢であつたよ
220 おそい月が町からしめ出されてゐる
221 わが肩につかまつて居る人に眼がない
222 蓮の葉押しわけて出て咲いた花の朝だ
223 切られる花を病人見てゐる
224 お祭り赤ン坊寝てゐる
225 陽が出る前の濡れた鳥とんでる
226 蜥蜴の切れた尾がはねてゐる太陽
227 お遍路木槿の花をほめる杖つく
228 病人花活けるほどになりし
229 朝靄豚が出てくる人が出てくる
230 迷つて来たまんまの犬で居る
231 すでに秋の山山となり机に迫り来
232 久し振りの雨の雨だれの音
233 都のはやりうたうたつて島のあめ売り

- 234 障子あけて置く海も暮れきる
235 あらしがすつかり青空にしてしまつた
236 淋しきままに熱さめて居り
237 淋しい寝る本がない
238 月夜風ある一人咳して
239 お粥煮えてくる音の鍋ぶた
240 一つ二つ螢見てたづぬる家
241 爪切つたゆびが十本ある
242 鳳仙花の実をはねさせて見ても淋しい
243 障子の穴から覗いて見ても留守である
244 入れものが無い両手で受ける
245 朝月嵐となる
246 秋山広い道に出る
247 口あけぬ蜆死んでゐる
248 せきをしてひとり (咳をしても一人)
249 墓地からもどつて来ても一人
250 恋心四十にして穂芒
251 なんと丸い月が出たよ窓
252 ゆうべ底がぬけた柄杓で朝
253 麦まいてしまひ風吹く日ばかり
254 今朝の霜濃し先生として行く

- 255 となりにも雨の葱畑
256 くるりと剃つてしまつた寒ン空
257 夜なべが始まる河音
258 よい処へ乞食が来た
259 雨萩に降りて流れ
260 師走の木魚たたいて居る
261 松かさそつくり火になつた
262 風吹きくたびれて居る青草
263 嵐が落ちた夜の白湯を呑んでゐる
264 寒ン空シヤツポがほしいな
265 蜜柑たべてよい火にあたつて居る
266 とつぷり暮れて足を洗つて居る
267 昼の鶏なく漁師の家ばかり
268 海風げる日の大河を入れる
269 山火事の北国の大空
270 墓のうらに廻る
271 あすは元日が来る仏とわたくし
272 夕空見ながら夜食の箸とる
273 窓あけた笑ひ顔だ
274 おそくなつて月夜となつた庵
275 小さい島に住み島の雪

- 276 名残の夕陽ある淋しさ山よ
277 故郷の冬空にもどつて来た
278 雨の中泥手を洗ふ
279 山畑麦が青くなる一本松
280 窓まで這つて来た顔出して青草
281 渚白い足出し
282 貧乏して植木鉢並べて居る
283 霜とけ鳥光る
284 あついめしがたけた野茶屋
285 森に近づき雪のある森
286 肉がやせてくる太い骨である
287 一つの湯呑を置いてむせてゐる
288 やせたからだを窓に置き船の汽笛
289 すつかり病人になつて柳の糸が吹かれる
290 春の山のうしろから烟が出だした

底本：『尾崎放哉句集』（彌生書房 一九九七年二月二五月初版発行）『尾崎放哉全句集』（春秋社 一九九七年二月一〇日第二刷発行）元テキスト入力：J. Utiyama テキスト追加入力・編集・ITZ作成：浜野 智 青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

この冊子は、青空文庫さんから、テキストデータをダウンロードしてオジャラが習字の手本として作成したので、連番がついております。俳句の読み合わせ会や、掲示板での質問のやりとりなどでも、番号がついていると便利だと思ふことも多いので、連番を消さずに、作成しました。

自由律俳句に親しみたいという方で、ご利用になりたい方がいらつしやいましたら、ご自由に印刷して、使ってください。なお、訂正や間違っている箇所等ございましたら、

